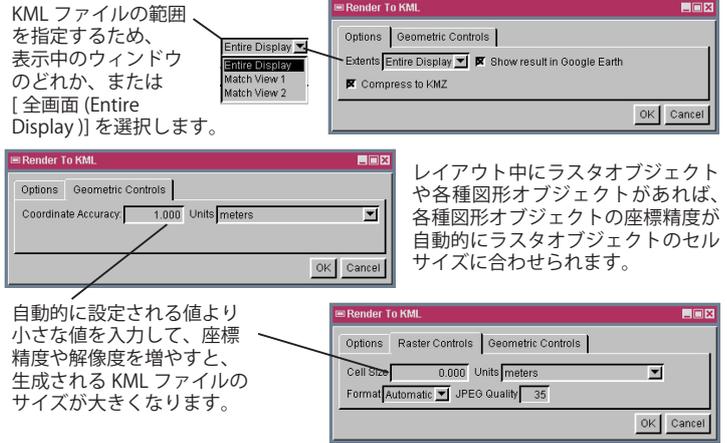


地図レイアウトの KML へのレンダリング

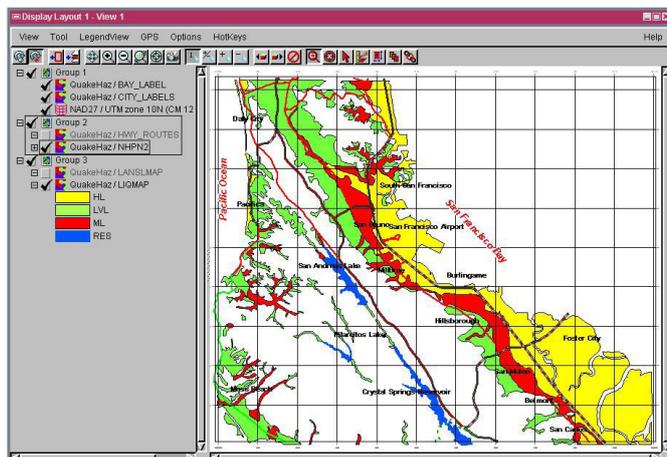
表示処理における KML へのレンダリング機能は、各種図形データ、ラスタ、マップグリッドおよびピンマップレイヤを含むグループや地図レイアウトの地理空間レイヤから KML ファイルや KMZ ファイルを生成します。グループやレイアウト中のレイヤのレンダリングの範囲は、表示に使われている全レイヤの範囲、あるいは開いている 2D または 3D ウィンドウの範囲です。KML や KMZ ファイルには全てのグループとその中の空間オブジェクトが格納されます。グループの個別の表示非表示の設定は保持されています。

ユーザは、KML へレンダリングする際のラスタのセルサイズや各種図形オブジェクトの座標精度をコントロールできます。〈KML へのレンダリング (Render to KML)〉ウィンドウは [オプション (Options)]、[ラスタコントロール (Raster Controls)]、[各種図形コントロール (Geometric Controls)] の 3 つのパネルで構成されています。後の 2 つのパネルはグループに各種図形レイヤもしくはラスタレイヤがあるときだけ表示されます。開いている任意の表示ウィンドウのグループやレイアウトの範囲を KML にレンダリング可能です。出力範囲は、[範囲 (Extents)] リストから選ぶことができ、リストには表示ウィンドウを開いたときのウィンドウ名が自動的に含まれています。[オプション] パネルには、レイアウトを KMZ フォーマット (KML を圧縮したファイル形式) でレンダリングしたり、Google Earth を自動的に起動して KML ファイルを表示するオプションがあります。[ラスタコントロール] および [各種図形コントロール] パネルの設定をデフォルトのままにすると、グループやレイアウトのラスタオブジェクトは全て可能な範囲で最高の解像度でレンダリングされます。そして各種図形オブジェクトの座標精度は、自動的にラスタオブジェクトのセルサイズに合わせられます。



レイアウト中の全ての地理空間オブジェクトは 1 つの KML ファイルにレンダリングされます。しかし、この KML ファイルを Google Earth に表示したとき、レイアウト中の各グループはツリー表示のフォルダのように [場所 (Place)] パネルに一覧表示されます。そこには各グループにあるオリジナルの TNT オブジェクトが別々のサブフォルダに格納されています。各サブフォルダは関連するオブジェクトタイプの内容を Google Earth のポリゴン、パス、プレスマークの要素の形で持ちます。従って、生成された KML ファイルの中の個々のレイヤは Google Earth のツールを使って調節することができます。

TNTmips で定義された線とポリゴン要素に対する表示スタイルも KML ファイルに保存されます。しかし、Google Earth で再現できないスタイルを TNT で指定したときは、必ずしも完全に一致するスタイルで表示されません。要素が希望したスタイルで表示されないときは、Google Earth のスタイル割り当てツールを使って空間エレメントにスタイルを再指定する必要があります。



上の図はデフォルト設定で KML ファイルをレンダリングした際のレイアウトです。結果の KML ファイルを Google Earth で表示したものが右図に示されています。ベクタオブジェクトのラベルは KML ファイルのプレスマークとして表示されています。プレスマークやグリッド線のスタイルは Google Earth のスタイル割り当てツールを使って変更しました。

下の図は、レイアウトを KML にレンダリングしたときの Google Earth の [場所] パネル中のベクタオブジェクトの内容を示しています。ポリゴン要素は割り当てられたスタイルでリストされています。TNTmips 製品の文字列フィールドとメモフィールドのデータを元に作られたデータタイプ情報が Google Earth においてエレメント名として表れています。TNT 製品でデータタイプの定義がない場合やデータタイプが他の型のフィールドから作られている場合、エレメントは何も識別情報が見つからず [場所] パネルにリストされます。[場所] パネルのエレメントの名前は 60 文字以内に制限されています。

